国立国語研究所共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」研究発表会

主節の名詞句と関係づけられる従属節のタイプ

福岡大学　　江口　正
t-eguchi@fukuoka-u.ac.jp

1 はじめに

本発表における問題意識

(1) a 引用節、間接疑問節の統語論的位置づけ（再考）
　b 「～する／したほか」「～したうち（で）」「～に加え」「～を含め」などの集合操作を表わす節の統語論的位置づけ

これらの要素が主節の名詞句と意味的に結び付けられるときにみられる分布を分析し、一般化を試みる。

2 引用節の文法的位置づけ

基本的問題意識：引用節・間接疑問節は「補語（補足語）」の一種とされることが多いが、実際に「目的語（／主語）」の位置を占めているのか。

引用節（下線部）と引用内容を表わす名詞句（□で囲む）は共起できる[1]。
（江口(1992), 江口(1998b)）

(2) a ありがとうと言った。
　b お礼を言った。
　c ありがとうとお礼を言った。
　d 太郎は実は5月に結婚するんだと言った。
　e 太郎は誰にも言っていなかったことを言った。
　f 太郎は実は5月に結婚するんだと誰にも言っていなかったことを言った。

トを用いない並列節も引用を表わせるが、引用内容を表わす名詞句と共起できる。

(3) a 来るだの来ないだの言いはじめた。
　b 困ったことを言いはじめた。

[1] これは発話動詞の場合に限られ、思考動詞の場合はその内容を表す名詞をヲ格で表せないため共起できない。

c 来るだの来ないだの、困ったことを言い始めた。

(2c), (2f), (3c)の引用節部分はヲ格名詞句と共起しているため、少なくとも目的語と見ることはできず、一種の付加句と考えられる。一方、(3)a の引用節はヲ格名詞が存在しないため、それ自体が目的語になっているようにも見える。

問題点：単独で現れる引用節(2a,d), (3a)と、引用内容名詞句と共起する引用節(2c, f),(3c)とは異なったステイタスにあるのか。

・ト節にはヲ格は現れないが、そもそも名詞でなく副詞だから。格が現れられないだけで、単独で現れる引用節であれば目的語と考えることは可能。（Sells(1990)など）

・並列節には名詞句の用法がある。では並列節の引用用法に格が現れることができるか。

(4) a *来るだの来ないだのを 困ったことを言い始めた。
b *来るだの来ないだのを 言い始めた。

(4)a の引用節部分は目的語と共起しているためにヲ格を付与できないと言えるが、(4)b の引用節部分は単独であるため格を受け取ることができてもいいはずである。しかし実際はヲ格を付与することはできない[2]。これは、単独で現れる引用節も付加的な位置に現れている引用節も「目的語」と違う同様の統語的環境にあるということを示唆する。

3 間接疑問節の文法的位置づけ

引用節だけでなく間接疑問節も、疑問の内容を名詞にした潜伏疑問の名詞句（□で記す）と共起できる。（江口(1990), 江口(1998a), 江口(1998b), 高宮(2003)など）

(5) a 誰が来るか調べた。
b 人数を調べた。
c 誰が来るか人数を調べた。
d 誰が来るかを調べた。

間接疑問節は(5a)～(5c)のように引用節と同様の分布を見せるが、一方で格助詞を直接付けた形も可能である。少なくとも格助詞が付いている場合は目的語になっているとみてよい。

格助詞が付く場合と付かない場合の違いは、基本的には焦点の分布に関わるものである（江

[2] 並列節の最後に「と」をつけることは可能である。また、「まだ「来るだの来ないだの」を続けているのか」というような「発言する行為そのもの」を名詞としてとらえて表現することは不可能ではないが、かなり座りが悪く、主文動詞も発言動詞ではなくなる。

ロ(1990), (1998a)などを参照)。格助詞が付く場合（あるいは連体修飾句になっている場合）は焦点になることができるが、格助詞が付かない場合は焦点になることができない[3]。

焦点を担える格助詞付きのパターンのほうがより「普通の」要素であると考えることもできるが、直感的にも実際の用例を見ても格助詞が付かない形のほうがより自然ではないかと思われる。ここでは焦点の分布と異なる観点から格助詞無しのパターンの位置づけを試みる。

Tomioka(2009)では、疑問詞疑問を含む間接疑問節は、遊離数量詞（＿＿＿で記す）で疑問詞の部分の対象を数えることができることが指摘されている。

(6) a メアリーは誰が歌ったか、3人ぐらい知っている。
　b その会社がどの国からワインを輸入しているか、3カ国ほど教えてほしい。

遊離数量詞は、名詞の数を表わすものであるため、間接疑問節を対象に「数える」ことができるのであれば、間接疑問節は名詞的な性質を持つと考えることもできる[4]。しかしこの指摘とは裏腹に、間接疑問節に格助詞を付与して明示的に名詞句にすると遊離数量詞で数えることがやや困難になる[5]。

(7) a ?*メアリーは誰が歌ったかを、3人ぐらい知っている。
　b ?*その会社がどの国からワインを輸入しているかを、3カ国ほど教えてほしい。

(7ab)は完全な非文とまではいえないが、少なくとも(6ab)よりも文法性が落ちているように思われる。一方、間接疑問節が潜伏疑問名詞句と共起している場合は文法性は落ちない。この場合は潜伏疑問名詞句が数えられる対象になっているものと考えられる。

(8) その会社がどの国からワインを輸入しているか、原産国を3カ国ほど教えてほしい。

(9)のように数量詞が間接疑問節の内部の対象を数えるのでなければ、助詞付きの間接疑問節でも問題なくなる。遊離数量詞の「数える対象」が問題ということである。

---

[3] たとえば、「誰が来るか｛*φ／の｝人数が知りたいんじゃなくて、誰が帰ったか｛*φ／の｝人数が知りたいんだ」のように、同じ潜伏疑問名詞句「人数」に対して間接疑問節の部分を対比的に示すことはできない。

[4] 数える対象は間接疑問節内部の疑問詞部分であり、節内部の要素を問題にするという点でTomioka(2009)は主部内在型関係節と同等のものとしている。

[5] Watanabe(1992)では間接疑問節内部の疑問詞が主文の疑問の対象になると論じられているが、これについても間接疑問節に助詞が付くと不適格になる（ジョンは[メアリが何を買ったかどうか]｛φ／*を｝誰に尋ねたの？）。遊離数量詞・主節疑問はともに間接疑問節内の特定の要素に主文の要素を結びつける操作と考えれば、格助詞付きの間接疑問節には内部要素に統語論的に直接アクセスできないという制約が課されているとみられる。

(9) その学生が授業に出席していたかどうかを 3 週間分調べた。

遊離数量詞が間接疑問節内部の対象を数えることができるかどうかという観点からすると、間接疑問節が単独で目的語的かあるいは他に目的語がある付加句的かどうかということよりも、格助詞付きかどうかという点のほうがより重要な性質であることがわかる。

引用節も間接疑問節も、それらが典型的に表れるタイプの文では述語の選択制限に直接関わるため項ととらえられるべきであると思われる[6]。しかし項であるからといって項として現れる名詞と同じ位置を占めなければならない理由はなく、以上の観察からさほど自明とはいえなくなる可能性が示唆される。ではどのような位置づけがよいのだろうか。

4 例示句と遊離数量詞

江口(1998a)では、ここまで見てきた引用句・間接疑問節と同様の「同格的構文」の要素となりうるものとして、並列構造や「など」による例示句を挙げている。以下、例示句を下線部で、同格的な名詞句および格助詞を□で記す。

(10) a この店では、ウイスキーとか焼酎とかを飲んだ。
b *この店では、ウイスキーとか焼酎とかφ飲んだ。
c この店では、強いお酒を飲んだ。
d この店では、ウイスキーとか焼酎とか、強いお酒を飲んだ。

(11) a 今日の OB 会には渡辺先輩や佐伯さんなどが来るらしい。
b *今日の OB 会には渡辺先輩や佐伯さんなどφ来るらしい。
c 今日の OB 会にはお世話になった人が来るらしい。
d 今日の OB 会には渡辺先輩や佐伯さんなどお世話になった人が来るらしい。

a は当該表現に格助詞が付いているもので、問題はないが、b は当該表現に格助詞が付いておらず、不適格な文になっている。これは普通の名詞句から格助詞を落とした場合と同様である。

一方、d は当該表現を同じ集合を表わせる名詞句と並置したもので、容認度は高い。当該表現は格助詞が付けられる点で名詞であることは明白であるが、d のように同じ指示対象を持つ名詞句に連体マーカーなしでつなげられる点で共通した性質を持っている。

---

[6] 複合述語「～てみる」は目的語とは別に「試す内容」を間接疑問節で表現できる。この場合、複合述語による選択は働いていても、主文の格体制には入らない項ということになる。次のような例の間接疑問節は格助詞を付与できない付加的な位置に生起している。「休まずに来ているかどうか、教室をのぞいてみた」

これらの表現は、遊離数量詞との共起に関して以下のような制限が生じる。

(12)　a ??この店では、ウイスキーとか焼酎とかを 5 種類飲んだ。
　　b この店では、ウイスキーとか焼酎とか、強いお酒を 5 種類飲んだ。
　　c この店では、ウイスキーとか焼酎とかを 5 杯飲んだ。
(13)　a ?*今日の OB 会には渡辺先輩や佐伯さんなどが 5 人来るらしい。
　　b 今日の OB 会には渡辺先輩や佐伯さんなどお世話になった人が 5 人来らしい。

(12a)(13a)のように、並列句に例示された要素を数える遊離数量詞は格助詞付きの形ではやや不適格になる。(12c)のように、例示された要素の一つ一つでなく、全部を一体として数えるのであれば容認度は上がる。一方、(12b)(13b)のように同格的に同じ集合を指す名詞句があれば遊離数量詞を用いることができるが、これは並列句を数えているというよりも名詞句で提示された集合を数えているように思われる。

助詞なしの例示並列句はそのままでは(10b)(11b)のように不適格だが、遊離数量詞があると文法性が改善する。

(14)　a (?)この店では、ウイスキーとか焼酎とか 5 種類｛を／φ｝飲んだ。
　　b (?)今日の OB 会には渡辺先輩や佐伯さんなど 5 人｛が／φ｝来るらしい。

完全に適格とはいいにくいが、遊離数量詞は同格の名詞句が生起するのと同様の働きを持ちうると考えることができよう[7]。

以上の観察で注目されるのは、遊離数量詞では例示並列句の格助詞付きのパターンが数えにくいという点である。これは格助詞付きの間接疑問節の内部要素も遊離数量詞で数えにくいということと並行しているものと思われる。しかも、(9)や(12c)のように「要素」のひとつひとつを数えるのでなければ、不適格にならないという点も共通している。この制限は以下のようにまとめられる。

(15)　間接疑問節・例示並列句に直接助詞が付けられてそのまま名詞句になっている場合、その内部情報に遊離数量詞はアクセスできない。

この性質はこれらの構造の統語論的構造と意味論的性質の両面から説明されるべきものであるが、どのような説明であれ、間接疑問節・例示並列句の両者に同じ説明が与えられ

[7] 単独で生起できるかどうかという点では間接疑問節と例示並列句は性質を異にする。間接疑問節が単独で生起できるのは、引用節と同様、特定の意味役割を担う形式であることに起因するものと思われる。

るべきものであると考えられる[8]。

本節では例示的並列句と間接疑問節の文法的な振る舞いの並行性を指摘し、間接疑問節のような分布様式がそれ独自のものではなく、例示並列句のように類似した分布を持つ要素があることを示した。このように「関係する名詞句との共起関係」に注目することによって直接図ることのできない統語論的位置を間接的に観察していくことは可能である。主文の名詞句と関係づけられる他のタイプの句についても検討を加える。

5 譲歩的並列句と同格の名詞句

譲歩の意味を表す句も並列句になるが、例示的な並列句と同様の分布を示すだろうか。まず、同格の名詞句との共起関係を見る。以下、譲歩句を下線部で、同格的な名詞句および格助詞を□で記す。

(16) a 次郎はうどんにせよ、そばにせよ、簡単に作ってしまう。
b 次郎はうどんにせよ、そばにせよ、麺類は簡単に作ってしまう。

(17) a 太郎だろうが、次郎だろうが、きちんと責任を負うべきだ。
b 太郎だろうが、次郎だろうが、その場にいた人はきちんと責任を負うべきだ。

譲歩的並列句も(15b)(16b)に見るように同格的な名詞句と共起することができる。この点では例示並列句と同様に見えるが、(15a)(16a)のように句単独で生起することもできる。一方、譲歩的並列句は例示並列句とは異なり、直接格助詞を後接させることはできない。

(18) a *次郎はうどんにせよ、そばにせよを、簡単には作ってしまう。
b *太郎だろうが、次郎だろうがが、きちんと責任を負うべきだ。

また、譲歩的並列句は遊離数量詞で数えることができる。

(19) a 次郎はうどんにせよ、そばにせよ、十人前くらい／何種類でも簡単に作ってしまう。
b 太郎だろうが、次郎だろうが、全員きちんと責任を負うべきだ。

こういった分布は、「取り立て詞／副助詞」による句の分布と並行したものとなる。

---

[8] 内部情報にアクセスできる場合の説明も必要であるが、どちらも目的語の位置に名詞句があれば解釈が可能になるところから考えると、省略された目的語を遊離数量詞で数えているという可能性が示唆される。こちらも検討が必要である。

(20)　a 次郎はうどんもそばも、麺類は十人前くらい簡単に作ってしまう。
　　b その場にいた人は太郎さえ責任を取らなければならなかった

例示並列句も譲歩的並列句も、いずれも文末表現がその起源となっていることが多い[9]が、一方は名詞的な表現になり、一方は取り立て詞／副助詞的な表現になっている。これは意味論的な違いによると思われるが、句全体の分布、つまり統語論的な差と連動していることも無視できない。

なお、取り立て詞／副助詞句の多くは同格的な名詞句と共起できるが、一方で特定の用法のものは同格的な名詞句と共起できない。

(21)　a こちらなどいかがでしょうか。
　　b 花子なんか会いたくない。
　　c コーヒーでも飲むべきだった。[10]

上記のタイプの取立て詞／副助詞句はいずれも同格的な名詞句と共起できないが、この種の共起制限が生じるという性質も一つのグループ化が可能であることを示している。これらには例示並列タイプの表現、引用タイプの表現、譲歩並列タイプの表現などが含まれ、文法的な拡張の一種とみることもできる。

6 集合操作表現の文法的位置づけ

江口(2000)、江口(2006)、江口(2010)では、「～のほか」「～のうち」「～をはじめ」「～に加え」「～を除き」「～を含め」などの集合操作の表現を取り上げ、その文法的性質を議論した。その結果、これらは次の 2 タイプに分かれることが明らかになった。

(22)　a タイプ A :「～のほか（除外)」「～を除き」「～を含め」など
　　b タイプ B :「～のほか（累加)」「～のうち」「～をはじめ」「～に加え」など

タイプ A は、（イ）単独で生起でき（ロ）その要素を含む集合を表わす句と同格になるが（ハ）同列の要素を表わす句とは同格にならない。譲歩並列句と類似した分布を示すものである。

(23)　a 花子は太郎のほか呼ばなかった。（イ）

---

[9] こういった表現が副助詞になる歴史の概観については衣畑(2011)を参照。
[10] 衣畑(2007)では、このタイプのデモは文全体に付加されたものとして分析されている。そう考えると、デモが直接付加された名詞を含む集合＝同格名詞句は存在できないことにも説明がつきそうである。

b 太郎は太郎のほか学生を呼ばなかった。（ロ）
c *花子は太郎のほか次郎を呼ばなかった。（ハ）

(24) a ??花子は太郎を含め叱った。（イ）
b 花子は太郎を含め学生を叱った。（ロ）
c *花子は太郎を含め次郎も叱った。（ハ）

このタイプは基本的には何らかの集合の存在を前提として、その中の要素が集合に対してどう関わるかということを表わすものである。

タイプ B は（ニ）単独では生起できず（ホ）その要素を含む集合を表わす句と共起するか（ハ）同列の要素を表わす句と共起するかすることが必要になるものである。

(25) a *花子は太郎のほか叱った。（ニ）
b 花子は太郎のほか学生を叱った。（ホ）
c 花子は太郎のほか次郎も叱った。（ヘ）

(26) a *太郎をはじめ、来た。（ニ）
b 太郎をはじめ、卒業生が来た。（ホ）
c 太郎をはじめ、次郎も来た。（ヘ）

これらは前もって特定の集合の存在は前提とせず、この文の中で集合を作って行くような意味を持つものである。後ろの名詞句は「同格」というよりその集合の本体を表わすような部分になる。このタイプは（ニ）の性質が強いが、遊離数量詞があれば名詞がなくてもよくなる点、例示並列句と同様の性質をもつ。

(27) a 花子は太郎のほか 3 人叱った。
b 太郎をはじめ、10 人ほど来た。

この制限に関する限りでは、遊離数量詞は名詞句の代用を果たしているといえる。

タイプ B は例示並列句の前に位置するため、語順でいえば本論で扱った句の中では先頭に来るものとなる。

(28) 太郎のほか、次郎や三郎など、責任者を集めた。

なお、上記の性質はこれらの表現が名詞に関する場合であり、節になっている場合は異なった性質になる。名詞の集合操作ではなく、文レベルの接続となるからと思われる。

(29)　a 太郎が来たのをはじめ、驚くようなことが起こった。

b 花子を呼んだほか、買い物に行ってもらった。

c 花子を呼ぶほか対処法はない。

d *花子を呼ぶほか対処法を教えてくれない。

(29ab)はハジメ句・ホカ句が後続の文の導入となっており、名詞は必要でない。(28cd)は除外のホカ節はガ格名詞としか結び付けないことを示している[11]。

参照文献

岩田美穂(2007)「例示を表す並列形式の歴史的変化―タリ・ナリをめぐって」青木博史編『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房, pp.93-113.

岩田美穂(2007)「「ノ・ダノ」並列の変遷―例示並列形式としての位置づけについて―」『語文』第 89 輯, pp.48-58.

江口正(1990) 「日本語の間接疑問文の構文論的特徴―数量詞・不定代名詞との類似点について―」『九大言語学研究室報告』第 11 号, pp.41-53.

江口正(1992)「日本語の引用節の分布上の特性について」『九大言語学研究室報告』第 13 号, pp.39-44.

江口正(1998a)「日本語の間接疑問節の文法的位置付けについて―不定的同格要素として―」『九大言語学研究室報告』第 19 号,　pp.5-24.

江口正(1998b)「引用節・間接疑問節と内容名詞句の共起関係について」『愛知県立大学外国語学部紀要』第 30 号(言語・文学編), pp.325-344.

江口正(2000)「『ほか』の 2 用法について」『愛知県立大学外国語学部紀要』第 32 号(言語・文学編) pp.291-310.

江口正(2006)「集合を設定する「ウチ」の分布特性」藤田保幸(編)『複合辞研究の現在』和泉書院 pp.235-247.

江口正(2007)「形式名詞から形式副詞・とりたて詞へ ～数量詞遊離構文との関連から」青木博史編『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房, pp.33-64.

江口正(2010)「集合操作表現の文法的性質 ～「をはじめ」「に加え」「を除き」「を含み」等の分析」『日本語文法学会第 11 回大会発表予稿集』, pp.126-133

奥津敬一郎(2007) 『連体即連用？』ひつじ書房.

角道正佳(1984) 「「ほかの」・「ほかに」・「以外の」・「以外に」」『日本語・日本文化』12, 大阪外国語大学留学生別科, pp.1-25.

片岡喜代子・宮地朝子(2011) 「ホカとシカの意味特質と統語的条件」『日本言語学会第 142 回大会予稿集』pp.170-175.

加藤重弘(2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.

[11] シカ句のこの種の性質については平野(1995)を参照。

川添愛(2001) 「日本語の「―たち」と数の素性」『日本言語学会第 123 回大会予稿集』pp.140-145.
川添愛(2002) 「『と』による等位接続と遊離数量詞」『言語研究』122 pp.163-180.
衣畑智秀(2007)「例示のデモの意味と構造と文末制限」『人文知の新たな総合に向けて（２１世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」）第五回報告書』, pp.193-206.
衣畑智秀(2011)「係助詞・副助詞」金水敏・高山善行・衣畑智秀・岡崎友子編『シリーズ日本語史 3 文法史』岩波書店, pp.167-189.
近藤泰弘（2003）「名詞句の格と副.格助詞と副助詞の性質.」北原保雄（編）『朝倉日本語講座第５巻文法 I』朝倉書店, pp.53-69.
高宮幸乃(2003)「現代日本語の間接疑問文とその周辺」『三重大学日本語学文学』14, pp.116-104
寺村秀夫(1993) 「連体修飾のシンタクスと意味 その 1～4」『寺村秀夫論文集 I』くろしお出版 pp. 157-320 (初出は『日本語・日本文化』4～7 号, 1975～1978).
西山佑司(2007)「名詞句の意味機能について」『日本語文法』7 巻 2 号 pp.3-19.
原久美子(2009)「除外表現「除く」―構造と 2 種類の除外」福岡大学卒業論文.
平野尚子(1995)「「しか」句の構文的特徴についての一考察」『九大言語学研究室報告』第 16 号, pp.105-115.
前原かおる(2002)「日本語の並列句の文法的性質について」 『広島大学日本語教育研究』12, pp.107-114.
宮地朝子(2010)「「ほか」の諸用法と名詞句の多様性」『名古屋大学文学部研究論集（文学）』56, pp.1-18.
森山卓郎(1995)「並列述語構文考―「たり」「とか」「か」「なり」の意味用法をめぐって」仁田義雄編『複文の研究 （上）』くろしお出版, pp.127-149.
Kinuhata, Tomohide, Miho Iwata, Tadashi Eguchi, and Satoshi Kinsui (2009) "Genesis of "Exemplification" in *Japanese' Japanese/Korean Linguistics* Vol.16 edited by Yukinori Takubo, Tomohide Kinuhata, Szymon Grzelak, Kayo Nagai, CSLI pp 87-101.
Sells, Peter (1990) “Is there Subject-to-Object Raising in Japanese?” in *Proceedings of the 5th Biennial Conference on Grammatical Relations*.
Tomioka, Satoshi (2009) "Japanese Embedded Questions Are Nominal: Evidence from QVE" Paper presented at Sixth Workshop on Altaic Formal Linguistics, Nagoya University.
Watanabe, Akira(1992) "Subjacency and S-Structure movement of WH-in-situ" *Journal of East Asian Linguistics* 1, pp.255-291.